

本の中のサツマイモ (4)

＜小川顕道著『塵塚談』、寺門静軒の『江戸繁盛記』＞

元 川越サツマイモ資料館長 いのうえ ひろし
井上 浩

1 小川顕道著『塵塚談』

* 著者の家柄

江戸の町医者、小川顕道はその極貧の病人たちを救うための公的施設、小石川養生所の設立に尽力した小川^{しやうせん} 笙 船の孫である。

徳川幕府中興の祖、徳川吉宗は享保6年、幕府評定所前に目安箱を設置させた。それは武士以外の者なら、だれでも幕府政治についての意見書を投書できるものであった。笙船は町医者としての長い経験から養生所の必要性を痛感し、その具体的な構想まで書いたものを目安箱に入れた。

加藤優一郎著『江戸の養生所』（PHP新書・2005年）によれば、町奉行所はそれを吟味し、自ら実行した。それが設置された場所は当時5万坪もあった幕府直轄の小石川御薬園の中であった。その内の1千坪が町奉行所に引き渡され、養生所の運営もそこに任された。養生所が誕生すると、笙船はその肝煎^{きもいり}職に就くことを命じられた。以来、その職は笙船の子孫の世襲となった。顕道はそのような小川家の人で、医師であり、文人でもあった。

* 青木昆陽の江戸でのサツマイモ試作

中央公論社版『燕石十種』第1巻（昭和54年）所収の『塵塚談』291頁に、「薩摩芋

の事」としてこうある。

「青木昆陽、『蕃藷考』といふ書を著し、享保二十年乙卯二月十五日に上書す」「同年三月、文蔵に植立候様被仰付、小石川養生所内へ圃を拵造り、元文元年辰、御止めに成、二年巳三月三日、養生所勤役の者へ芋割賦し、芋圃引払被仰付、其後諸国へ流布して、人毎に食し、朝夕の助けとなれり、宝暦年間に至りては、上総、下総、銚子、岩槻、伊豆大島、其外諸所より多く作りて、江戸へ運送す、銚子を上とし、大島より出るを島芋と云て絶品也、近年に至り、大なる国益と云べし」

* 江戸時代の元号

2019年5月1日、元号が「平成」から「令和」になった。それで元号についてのさまざまな話が盛り上がってきたので、『塵塚談』にある享保・元文・宝暦の前後の元号を並べてみると、こうなる。

元禄^{げんろく} (1688～1704)・宝永^{ほうえい} (1704～11)・正徳^{しょうとく} (1711～16)・享保^{きやうほう} (1716～36)・元文^{げんぶん} (1736～41)・寛保^{かんぼう} (1741～44)・延享^{えんきやう} (1744～48)・寛延^{かんえん} (1748～51)・宝暦^{ほうれき} (1751～64)・明和^{めいわ} (1764～72)・安永^{あんえい} (1772～81)・天明^{てんめい} (1781～89)・寛政^{かんせい} (1789～1801)・享和^{きやうわ} (1801～04)・文化^{ぶんか} (1804～

18)・文政^{ぶんせい} (1818～30)・天保^{てんぽう} (1830～41)。

幕命による青木昆陽の江戸でのサツマイモの試作は享保20 (1735) 年であった。それから16年後の寛延4年 (1751) には川越藩領の南永井村の名主・吉田弥右衛門もサツマイモの試作に成功している。

小川顕道によれば、「寛延」の次の「宝暦」年間には、早くも江戸向けサツマイモの特産地が関東各地に現れていたことがわかる。その中の一つに、武州では「川越いも」に先行していた「岩槻いも」があったこともわかる。

2 寺門静軒の『江戸繁盛記』

江戸の町儒者、寺門静軒^{てらかどせいけん}は寛政8年、江戸で生まれた。寛政期といえば、江戸に初めて焼きいも屋が現れた年である。静軒は文化・文政期に育ち、やがて駒込や谷中で儒学の私塾を開いた。その後、天保3年から天保7年にかけて上掲書を漢文で書いて出版した。それは当時の江戸の風俗・習慣などを得意の漢文で、いきいきと書いたものであった。それが漢文を読める知識人たちに受け、ベストセラーになった。

ところがそれがその後の天保12年から14年にかけて老中・水野忠邦^{ただくに}が主導した勤儉主義、風俗の矯正などのきびしい天保の改革に引っかかってしまった。同書が採り上げたさまざまな話題の中に、不適當なものが多くときめつけられてしまった。静軒は江戸追放、『江戸繁盛記』の版木は焼き捨てという苦渋をなめさせられた。

以来、失意の静軒は放浪の暮らしとなり、最後は武州大里郡^{かぶとやま} 胃山村 (埼玉県) の名主、根岸家で亡くなった。それは明治維新直前

の慶応4年3月のことであった。

* 佐藤進一氏訳の『江戸繁盛記』

『江戸繁盛記』は漢文で書かれているため、明治以降の人びとにとっては読みにくい本になった。それでいくつもの現代語訳本が現れた。その一つに三崎書房の史録叢書1に収められている上掲書がある。1972 (昭和47) 年出版のそれによれば、同書は五編から成っていた。その第一編のテーマを見ただけでも面白そうなものがたくさんある。参考までにそれを全部並べてみると19もある。

相撲・吉原・戯場 (芝居)・千人会 (とみ)・金亀山浅草寺・楊花 (おんなぎだゆう)・両国花火・売卜先生・書画会・火場 (かじば)・縁日・女剃師 (おんなかみゆい)・富沢坊の古着市・山鯨 (イノシシの肉)・煨薯 (やきいも)・日本橋魚市・上野・入篇の詩・過分の称賛がそれである。

江戸の裏長屋に住んでいたという説もある静軒の暮らしは楽ではなかったらしい。焼きいもで飢えをしのぐ日も多かったようである。だから繁盛記のテーマ選びでも、その初篇から江戸の焼きいも事情を取り上げている。その要点はこうある。

「蕃薯は、もとは呂宋の産。明の万暦中に初めて漢土へはいった。わが国へは、元禄戊寅に琉球王が伝えてくれたということ」を史実が物語っている。江戸に流行したのも、久しい以前からのことだった」

「煨薯^{やきいも}は関西では琉球薯と云い、関東では、薩摩薯^{さつまいも}と呼んでいる。が、江戸の婦人ばかりは阿薩^{あさつ}だと云っている。それが、これを商う店頭看板に、八里半と書かれたのはどうい^くうわけか。栗の字は、国音が九里に

似通っている。そこで^{やきいも}煨薯と栗と比較すると、その風味はよく似ているが、微細に味覚を働かせてみると、ちょっと味が下位にあるように思われる。それだからしゃれて八里半と云ったのだということだ」「以前はこの薯の種苗が少なくて自然値が高かった。そして毒素を包含しているとまでさえ伝えられたので、食わなかった者が多かったとかいうことだ。それが時代の推移とはいえ、現代のように流行を極め、貴賤老幼となく食い、値段も非常に低廉になってきたとは意外の現象だ。冬季になると、冬季中に一軒の煨薯屋があげる売揚金は、少なくとも、二三十両はあるという。客足の多い店になると、百両までの売揚金があるとかいう」

「煨薯屋は、毎日朝の^{むつ}卯時（午前六時）

から店を開けて夜の^{よつ}亥時（午後十時）まで煨きつづける。^{かまど}竈の煙はもうもうとあがり、いもの焦げる香りがぷんぷん鼻を打つ」「産婆も買いにいけば、老爺も買いに行く。おさんどんも買いに行けば下男も買いに行く。お嬢さんが下女に買いにやらせる時には、きっと小声で『また^{おさつ}阿薩を買っておいで』という」

「四文も買えば子供の泣き叫ぶのがなだめられるから、十文も買えば、いうに書生の朝飯がわりにはなる。まったく重宝な食物だ」（72～74頁）。

江戸の焼き芋屋の繁盛振りを寺門静軒以上に詳しく、おもしろく書いてくれた文人は見当たらない。